

<研究ノート>梅謙次郎の清国訪問について

著者	青木 俊介
出版者	法学志林協会
雑誌名	法学志林
巻	112
号	3
ページ	1-29
発行年	2015-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/11638

梅謙次郎の清国訪問について

はじめに

「日本民法の父」と呼ばれ、東京帝国大学法科大学教授兼法政大学総理であった梅謙次郎が一九〇六年（明治三十九年／光緒三十二年）、韓国（大韓帝国）における最初の法典編纂調査をおえたその足で清国を訪問し、各地で要人と会見したことはつとに知られている。しかし、その旅行の詳細については今日あまり把握されていない。

こうした状況に至った要因は、清国での梅の言動が新聞報道や雑誌記事、個人の日記といった零細な媒体で断片的に語られているに過ぎず、全体像を俯瞰し難いことにあると考えられる。わずかに史洪智氏が、論文「日本人法学者と清朝末期の政治改革」の中で当時の中国における新聞報道を追い、梅の旅程を復元しているものの、^{（一）} 専論ではないためなお不十分であり、考察

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

の余地を残している。

そこで本稿では、上述のような細かな関連史料を集成し、清国訪問時に梅がどこへ行き、誰と会い、どのような発言をしたのか、そしてそもそも何を目的とした旅であったのかを明らかにしてみたい。

一、清国訪問の時代背景

梅謙次郎の清国訪問について述べる前に、当時の時代背景に触れておきたい。

一八九五年に下関条約が結ばれ、日清戦争における清の敗北が確定する。およそ三〇年にわたる洋務運動（西洋技術の導入）により、軍備（ハード）においては清が日本に勝っていた。それにも関わらず敗れたことで、若手官僚を中心に制度（ソフト）改革の必要性が叫ばれるようになる。その結果、康有為や

青木俊介

譚嗣同ら変法派若手官僚、李鴻章や張之洞ら洋務派官僚、それに光緒帝の支持が加わって、一八九八年六月に戊戌の変法が開始された。しかし改革は、西太后をはじめとする守旧派の抵抗、急激な変化を望まない洋務派の離反によってわずか一〇〇日で挫折してしまう。

それから二年後の一九〇〇年、「扶清滅洋（清を助け外国勢力を排除する）」をスローガンとする義和団の運動に清国中央政府も便乗し、排外政策に舵を切る。ところが、列強八か国の連合軍に紫禁城を占領され、西太后も北京脱出を余儀なくされる事態に陥った。ここに至って守旧派も改革の必要を痛感し、光緒新政がスタートすることとなる。

一九〇一年、湖広総督張之洞と両江総督劉坤一による共同の上奏文、いわゆる「江楚会奏变法三摺」が提出され、新政の基本方針が確立する。「会奏」は様々な分野での改革を提言しているが、その中で梅が関わりを持つこととなるのが、法制改革と教育改革である。

清国政府は近代法の制定を目的として、刑部左侍郎の沈家本らを修訂法律大臣に任命し、一九〇四年五月には専任機関である修訂法律館が開館した。またその翌年には、法制改革に従事する人材を養成するため、法律の専門学校である京師法律学堂を刑部のもとに設置することが決まり、準備が進められていた（一九〇六年一〇月開校）。

教育の方面では一九〇二年に、義和団の乱で壊滅した京師大

学堂が再建（一八九八年創設）され、そこに師範館（教員養成）・仕学館（官吏養成）・同文館（翻訳者養成・進士館（科挙合格者の教育）などを置き、近代的高等教育を行った。一九〇四年には、張之洞らによる「奏定学堂章程」の発布によって新学制が規定された。そして翌一九〇五年九月の科挙廃止にともない、一二月には学部（文部省に相当）が設置されて、經学を中心とした旧来の教育制度に代わる近代学校制度の整備がはじまった。

諸改革や教育を行うには専門知識を有する人材が必須なわけだが、当時の清国ではそれが絶対的に不足していた。そこで「会奏」は、距離的にも文化的にも近く、明治維新を成し遂げた日本に学ぶことを提唱している。そのため、多くの日本人が渡清して改革事業や教育にあたることとなった。また張之洞は、一八九八年発表の自著『勸学篇』でも主張していたように日本への留学を奨励し、多くの清国人青年が日本で学んだ。

数多くの人材が至急求められる中で、「会奏」は明治初期の日本において採用されていた速成教育に注目している。このような清側の要望に沿う形で、日本の教育機関も清国人留学生を対象に、通訳を利用して短い期間で教育を行う速成課程を相次いで開設した。その代表的存在が、梅が総理を務める法政大学の法政速成科であった（以下、法政大学法政速成科を「速成科」、それに類するものを全般を「速成課程」と称する）。

『法政大学史資料集』第一一集（法政大学清国留学生法政速

成科特集〕によれば、速成科設置の経緯は以下のとおりである。

一九〇四年三月、清国人留学生范源廉・曹汝霖が梅に設置を請願したところ、梅がこれを快諾。さらに、時の外務大臣小村寿太郎を介して梅と駐日清国公使楊樞が会談し、楊の賛同を取り付ける。その後、同年四月二十六日に文部省へ申請、三〇日に設置認可が下り、五月七日に開講した。⁽²⁾

この間わずか二か月足らず。驚異的ともいえる早さで開講に漕ぎ着けた背景を、楊樞は西太后への上奏文の中で説明している。

先年、日本の近衛篤磨公爵と長岡護美子爵が我が国の勲章を受けた際、前留学生総監督汪大燮と会談して、東京に中国人留学生のための法政速成学校を設立したいと考え、学校の規定も一応できました。しかし、汪は離任し、近衛も亡くなったために中止となってしまいました。私は汪の後任としてこの事業を引き継ぎたく思っていました。が、ちょうど東京法政大学総理の梅謙次郎もまたそのような建議をしてきました。そこで私は長岡から先の仮の学校規定を受け取り、これを稿本に梅と参酌して改定にあたり、遂に法政大学内に法政速成学科を特設して、専ら中国の留学生を教育することになったのです。私はでき得る限りの協力をし、日本の文部省からも認可されました。⁽³⁾

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

近衛篤磨と長岡護美は東亜同文会の会長と副会長である。もとも同会が運営する清国留学生のための教育機関、東京同文書院に速成課程を設置する計画が進んでおり、書類の作成もほぼ完了していた。計画は当事者のアクシデントにより頓挫してしまったが、楊樞と梅によって実現されることとなった。その際、先の計画で作成された書類を引き継いだために、スピード開講が可能となったものと見られる。また、清国人留学生の請願がきっかけであったものの、速成科の開設に楊樞ら官側の意向が絡んでいたことは明らかである。

清国政府の政策に、速成課程の開設といった日本側の受け入れ体制の充実も加わって、清国人留学生の数は急増し、ピーク時の一九〇六年には一万数千人に達していたといわれる。⁽⁴⁾ これら留学生の中には革命運動に身を投じた者も多く、一九〇五年八月には東京で中国革命同盟会が結成されるに至った。また、学業そっちのけで遊興にふける素行不良の学生も少なくなかった。

こうした状況を危惧した清国政府は留学生の管理体制を強化すべく、一九〇五年一月に日本政府をして「清国留学生取締規則」を公布させたが、留学生たちの激しい反発を招き、授業のボイコットや帰国運動が巻き起こった。反対運動は翌年には鎮静化したものの、なお根本的な解決を見ないままであった。

清国内で改革が始動し、日本では留学生問題を抱える。まさにそのような時期に梅は清国を訪れたのであった。

二、清国における梅の動向

梅謙次郎の清国訪問は、一九〇六年八月から一〇月にかけての約五〇日間にわたった。本稿付録の「梅謙次郎清国訪問旅程表」は、当時の新聞報道や雑誌記事、関連人物の日記や帰国後のインタビュー記事などにもとづいて梅の旅程を復元したものである。以下、その内容について詳解する。

なお、旅程および旅行中の活動内容に関する典拠史料は「旅程表」に掲載し、本文ではいちいち注記しない。また、典拠史料の正式名称および出典についても、「旅程表」付載の「典拠史料略称一覧」を参照されたい。

【仁川・大連（八月三日～八月二十七日）】

梅は韓国の土地関連立法のために調査をした後、八月二五日に仁川で結城琢、永原寿太郎という二人の随行者とともに信濃川丸に乗船し、中国は遼東半島の大連へ出航した。結城は蓄堂の号で知られた漢詩人であり、新聞『日本』の記者でもあった。永原は「丘逢甲日記」などによれば、光村公司（光村合資会社、現在の光村印刷）理事とのことである。そしてともに政法大学の校友であることが、当時の『法学志林』に掲載された校友会関連記事からわかる。

八月二六日午後七時、梅ら一行は大連港に到着。数十名の官民に迎えられ、警城町扇芳亭に設けられた歓迎会の席に案内さ

れた。前年のポーツマス条約によって日本の租借地となっていた当時の大連は、南満州鉄道株式会社の発足を三か月後に控え、租借地の建設・経営にあたる日本人が入植しつつある頃であった。そうした現地日本人居留者によって、梅は熱烈的な歓迎を受けたのである。

歓迎会は午後一時まで続き、その後、梅らは伊勢町の東洋ホテルに投宿した。

翌八月二十七日は早朝よりホテルで多くの訪問客に接見し、午前一一時から美濃町千勝館において政法大学出身者による慰労の宴が催され、大学の将来や時事の問題について懇談した。主催者である石炭商の佐藤至誠は後年、大連商工会議所会頭や大連市議会議員などを務め、当地の実業界を代表する人物となる。また、梅は千勝館館主の懇請により、「花笑鳥舞」と揮毫している。

同日の午後二時から民政署庶務部長関屋貞三郎の案内で大連市内を見物した後、多くの人々に見送られつつ、午後六時発の列車で北京に向けて出発した。

【北京（八月三二日～九月一〇日）】

八月三十一日、一行は北京に到着して御河橋畔の六国飯店に入り、翌九月一日に日本公使館を介して、清国政府の実力者である直隸総督・北洋大臣袁世凱に会見を申し入れている。袁は清国人留学生の教育に対する梅の尽力を聞きおよんでおり、これを快諾した。なお同日には、立憲政体への移行準備を命じる詔、

「宣示預備立憲先行釐定官制論」(立憲の上諭)が發布されている。

梅と袁との会談は九月二日、⁽¹⁰⁾頤和園万寿山麓の北洋公所において行われた。会談はおよそ一時間にわたって行われ、次のような内容が話し合われたという。

梅は袁世凱に対して、清国人留学生を収容する大寄宿舍を東京に建設するよう熱心に勧めている。⁽¹¹⁾これは文部大臣牧野伸顕の依頼によるものであった。

「取締規則」第九条において、各学校は留学生を寄宿舍または監督下にある下宿などに宿泊させることが定められていた。⁽¹²⁾

ところが、留学生の急増に対して寄宿舍が不足しており、⁽¹³⁾留学生総監督を兼務していた清国公使楊樞もこれを問題視している。梅によって提示された留学生問題解決への具体的な方策に袁は喜んでいたという。

袁からは一年半の速成科の修学期間を延長するよう要請があった。修学期間を延長すれば「速成」ではなくなるため、これは実質的に速成科の廃止を意味する。

この要請の背景には、日清両国で高まりつつあった速成教育に対する疑念があった。前述した清国政府の意向に加え、学生としても手軽に留学でき、そして帰国後の栄達も望めるため、速成課程へ入学する者が相次いだ。一九〇七年の時点で日本に留学していた清国人のうち、速成課程の学生は実に六割を占めていたといわれる。

梅謙次郎の清国訪問について(青木)

しかし、速成課程の修学期間はあまつさえ短いうえに、通訳を介して講義が行われるので授業時間は実質半分ということになる。よって、一知半解のまま帰国してしまう学生が多数おり、速成教育の弊害が露呈しつつあった。また、営利主義に走り、学生に迎合して期間をごく短く設定する教育機関も続出し、「学店」「学商」と呼ばれ批判的となっていた。そのため会談の一月ほど前には、学部から清国内各省に対して速成課程への留学生派遣停止が通達されるに至っていたのである。⁽¹⁴⁾

こうした事情にもとづく袁の要請を梅は承諾。翌一九〇七年には、速成科に代わる三年課程の普通科が法政大学に設置されることとなった。⁽¹⁵⁾すでに速成課程への留学生派遣停止は決まっていたわけだが、速成科の廃止ではなく、学期延長という形で要請したのは、袁が法政大学の留学生教育を高く評価し、その継続を望んでいたことの表れであろう。

梅は法政大学総理として教育問題を協議しただけでなく、法学者の立場から清国の法制改革に関しても自説を開陳した。「談判」によると梅は、

法典編纂は国家の大事であり、欧米諸国に比して遜色のないものにしなければならぬ。しかし、たとえ法律がすばらしくとも、優良な裁判官がいなければならぬ。そうでなければ法を行使することはできず、外国人に自国の法権を受け入れさせることは難しい。要するに法典の良否と条

約改正との関係は小さくなく、障害なきを期すべきである。⁽¹⁶⁾

と述べ、袁世凱もこれを善しとしたという。この発言に対する分析は後節で行うが、法典編纂と条約改正（領事裁判権の撤廃）の関係を強調している点に注目しておきたい。

また「視察談（梅）」は、梅が袁に会った際、立憲の上諭が立憲政体への移行年限を定めていないことに触れ、時機に適した仕方であると賞賛したことを載せる。ところがこの年限についての話は、ほぼ同内容の記事である「清韓談下（日）」⁽¹⁷⁾では国会召集時期のこととして見えており、袁世凱に対してそれを述べたという記述はない。加えて、数日後の演説では正反對の主張をしているので、「視察談（梅）」の伝える話は信憑性に欠ける。

九月五日には、畿輔先哲祠において歓迎会が開かれた。この会の主催者は、教育改革の中心人物であった学部左侍郎の嚴修であったと思われる。嚴は一九〇四年の日本視察の際に梅と面会し、速成科の民法の講義も聴講しており、梅とは旧知の間柄であった。また、袁世凱とも親しく、梅の評判は嚴を通じて袁の耳に届いていた可能性が高い。⁽¹⁸⁾

「嚴修日記七・一七」にはこの日の参会者が記されているが、速成科の建議者である范源廉と曹汝霖をはじめ、速成科の卒業生やその他日本留学経験者が大部分を占めており、懇親会としての側面もあった。これらの人々のほとんどは清国政府の若手

官僚であり、後に民国政府の高官となる人物も含まれている。加えて、京師大学堂師範館正教習として赴任していた中国哲学者服部宇之吉の名も見え、一同で記念撮影をしている。

数日前に立憲の上諭が下されたばかりということもあり、この席で梅は、立憲の三大条件について演説している。その条件とは、第一に立憲の年限を速やかに頒布すること、第二に条約を改正して領事裁判権を回収すること、第三に新律を策定して治外法権の回収を期すことであるとし、聴衆から大いに賛同を得た。

嚴修と范源廉は九月九日にも六国飯店に梅を訪ね、午後一時まで食事をともにしている。来訪の目的は典拠史料に記されていないが、別の史料から推測することができる。

科挙の廃止にともない、科挙合格者（進士）の教育機関である進士館も閉鎖となった。そこで清国学部は、在学生を法政大学の補習科および速成科へ派遣するよう上奏した。⁽²⁰⁾『法学志林』第八巻第一号（一九〇六年）掲載の「法政速成科と北京進士館」によると、進士館教頭の嚴谷孫蔵がこの件について法政大学と交渉し、「更に清国学部より滞清中の梅総理に熟議を遂げたのだという。また梅本人も「清韓談下（法）」において、この要請を引き受けて来たことを述べている。嚴と范は学部の左侍郎と主事であり、九月九日の来訪時に「熟議」が行われたのではないだろうか。少なくとも「嚴修日記」には、この日以外に話し合いが行われた形跡は見当たらない。

それから日付は不明ながら、北京では清室きつての開明派・親日派として知られた肅親王愛新覺羅善耆とも会談したことがわかつている。領事裁判権の撤去について話をしたもの、容易には行われ難いと信じている風であつたらしい。また、当日の親王は体調がすぐれず、遺憾の意を表していたとのことである。

梅一行は九月一〇日の夜、北京前門駅で嚴修と范源廉に見送られながら、京漢鉄道の快速列車に乗って湖北省の漢口へと出発した。

【武漢三鎮・長沙（九月一二日～九月三日）】

九月一二日、梅たちは漢口に到着。⁽²¹⁾この地に宿を構えて武漢三鎮（武昌・漢口・漢陽）を往来する。

漢口に到着して間もない頃、梅らは張之洞の腹心で湖北省提刑按察使司（臬司）の梁鼎芬に招待され、武昌にある東路・南路の高等小学堂を視察。各学堂の教員に、法政大学発行の漢文雑誌『東洋』を進呈している。

また「清韓談上」に、「武昌へ行ったことが三回」とあるため、この日と張之洞を訪問した日のほか、武昌へはもう一日行っているはずだが、詳細は不明である。

その後、一行はいったん湖南省の省都である長沙へ行き、湖南巡撫の龐鴻書や土地の有力紳士である張承祖なる人物を訪問している。

九月二〇日の朝に漢口へ戻ってきた梅らは、その日の午後、

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

漢陽の古琴台や大別山を観光。二一日夜には、漢口領事水野幸吉（帝大在学中の三年間、梅が担任であつた）宅にて日本料理を振る舞われ、二二日も午後九時から翌午前二時まで横浜正金銀行漢口支店長の武内金平らと飲み明かしている。

本来、二二日には張之洞との会談が予定されていたのだが、張の病氣のためにキャンセルとなり、二二日は張の古希祝賀会であつたため再び延期されたのだという。これにより、当初計画されていた旅程（旅行予定）⁽²³⁾に狂いが生じはじめている。

ようやく九月二三日の午前十一時、武昌の湖広総督衙門正堂において、張之洞との会談が開かれることとなった。元駐日公使汪鳳藻の弟で前武昌知府の汪鳳瀛や、通訳官で東京帝国大学工科大学卒業生の沈珉、湖北鉄道顧問官として現地に滞在していた原口要と、その専属通訳である秋山煜禎が同席する中、約二時間にわたつて次のような話がなされた。

日本留学の旗振り役である張は、「清国留学生取締規則」策定の主導者でもあり、留学生の動向を大変気にかけていた。そのため、梅に留学生を監督する方策を尋ねたところ、梅は、留学生問題は楊樞公使が報告するほど甚大ではなく、文部当局と熟議して改善をはかると答えた。

それから話は外交の件におよび、領事裁判権の撤廃について、兵力が充実しなければ条約改正は望めないと嘆息する張に対し、梅は、すでに各国の学者は領事裁判権の非を認めており、必ずしも兵力に頼むべきことではないと述べている。

話をおえた張は、「他日法律上の事に就ては、博士に諮問して、其指教を請ふ」「今日の会談は、益を享くこと甚多く、胸中の芥蒂を一掃し去りたり」と、すこぶる満足の意を表したという。

梅たちはその日のうちに南京へ向かわなければならなかったため、張からの供宴の誘いを固辞し、午後一時頃に湖広総督衙門を辞去している。

その後、湖北省釐金局長曾某の招きにより、漢江春という酒楼で食事をしてから、午後四時に武昌を発ち、午後五時に漢口の旅館に戻った後、午後八時半の汽船で南京へ出発した。

【南京（九月二十五日～九月二十六日）】

九月二十五日に一行は南京に到着し、悦生公司に投宿する。両江總督周馥⁽²⁵⁾は政法大学の卒業生を派遣して歓迎会を設け、翌九月二十六日の朝に記念撮影を行った。ただ、梅らはその日すぐに上海へ出発したため、十分な歓待ができなかったと報道されている。

南京では、速成科第一班卒業生で広東法政学堂監督（校長）の夏同和に電報を打ち、広州訪問の予定を知らせている。これを受けた夏は両江總督岑春煊に告げて会談を設定し、歓迎大会を準備。さらに、曾昭声（広東法政学堂庶務、速成科第二班卒業生）と阮金樓（通訳）を香港まで迎えにやって、梅の来訪に備えた。

【上海・膠州湾（9月10月五日）】

上海では、商約大臣として各国との通商航海条約改正交渉にあたっていた呂海寰と、上海道台の瑞澂⁽²⁷⁾に会ったことが梅によって語られているが、会見の詳細はわからない。

続いて、当時ドイツの租借地となっていた山東半島の膠州湾（青島）を視察している。その目的は韓国の仕事の参考のためであったという。

膠州湾から戻った梅たちは一〇月五日、汽船に乗って上海を出航し、香港へ向かった。

【香港・広州（一〇月九日～一〇月二日）】

一〇月九日、香港に到着すると、翌一〇月一〇日の午前九時に⁽²⁸⁾、広州の広東法政学堂を訪れた。軍樂が演奏される中、監督の夏同和と広東省提学使司の段書雲によって歓迎会場に迎え入れられ、通訳の章某と阮金樓から歓迎の言葉が述べられた後、梅は登壇して演説を行った。

この時の演説の主旨は、立憲準備の要点は議会にあって議会の人格は初等教育を基礎とするということ、法典編纂、学理の研究の三つであり、聴衆の喝采を浴びたという。

この日は広東法政学堂から宴席にも招かれ、そこで梅は旅行の大略を説明し、漢口が将来繁栄するであろうこと、広東が全省の中で冠たる存在であることを述べた。さらに、詩一首を賦して学堂の各学生に贈った。また、随行の結城琢も漢詩人としての本領を発揮し、やはり詩人で広州府中学堂監督の丘逢甲と詩を交わしている。その後、参会者は運動場に出て記念撮影と

植樹を行った。

翟海濤氏の研究によれば、広東法政学堂には夏同和や曾昭声をはじめ、実に二二名の速成科卒業生が在職していたとのことである。⁽²⁹⁾ 加えて「清韓談上」によると、梅が周旋した二人の日本人法学士も同学堂の教習として赴任していた。この二人とは、第五高等学校教授の松山豊造と司法官試験補の関山富のことと思われる。⁽³⁰⁾ 広東法政学堂における熱烈な歓迎の背景には、梅と縁のある多くの人々の存在があった。

さらに同日のことと思われるが、広州居留の日本人から夕宴に招かれて⁽³¹⁾いる。会場は、珠江に浮かぶ二階建ての樓船数十艘をあたかも街道のように連ねた船上料理店であり、約二〇〇畳の部屋が二・三室あるというその広大さに驚いたと梅は述懐している。

翌一〇月一日、梅は両広総督岑春煊との会談・会食に臨んだ。その席で岑より清国発展のことについて問われた梅は、清は大国であるので、日本のようにある有力者が自己の意思によって国の進歩をはかることは難しいであろうと答えている。

この岑との会談が主要なイベントとしては最後のもので、一〇月一二日に梅らが乗った船は香港を出航。上海を経由して日本へ向かい、一〇月二〇日午前九時、列車で新橋駅に帰着した。「旅行予定」では一七日東京着となっていたので、予定よりも三日遅れということになる。

以上が現在判明している清国における梅の動向である。この

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

旅行中に梅が会談した人々は、変法改革の鍵を握る人物ばかりである。「帰京」によれば、梅はこれら要人たちと主に、留学生の教育、法典編纂、領事裁判撤去について意見交換したという。最初の一点は法政大学総理としての立場から、後の二点は法学者としての立場によるものといえる。次節ではこのうちの後者に関し、梅が清国において展開した主張を検討する。

三、清国における梅の主張と法典実施断行論

清国訪問時、要人との会談や講演の中で梅が訴えた主張は、日本の外務省が北京で発行していた中国語新聞『順天時報』において、一九〇七年四月四日から四月七日の間に連載された「条約改正与法典編纂⁽³²⁾」という論文に体现されている。その論文の締めくくり部分から要点を抽出し、日本語訳したものを簡条書きで掲示する。

A 条約改正のためにはまず法典を定め、法典も欧米と大差ないものにしなければならぬ。

B 風俗習慣もまた欧米と同じにならなければ（法典に）合致しない……法典ができたならばこれを施行し、すべての国民もまた旧風を一新することができる。

C 法典編纂は一大事業であり、無理に期限を決めて行うべきではない。

D裁判官の養成を第一の急務とせよ。

条約改正ニ領事裁判権の撤廃と法典編纂の緊密な関係を強調するAは、論文の題名にも表れているように、梅の学説の根幹であった。旅行序盤の袁世凱との会談や畿輔先哲祠での演説において同様のことを主張しているし、肅親王や張之洞との会談では領事裁判権の撤廃に触れ、広東政法学堂での講演においては法典編纂について言及しているので、梅は清国訪問中、終始このことを訴え続けていたことがわかる。

それからDについては、袁世凱との会談における発言の中に確認することができる。さらに、(真偽は微妙であるが)上諭が立憲の期限を定めていないことを賞賛したというのも、Cの考えにもとづくものであろう。

さて、日本においては旧民法を編纂し実施に移す際に民法典論争が起こったわけだが、清国が同文同種の国であり、日本に倣って法制改革を進める以上、同じような論争に直面することは必然であった。李貴連氏の研究によれば、修訂法律大臣沈家本も泰西的法律の採用による領事裁判権の回収を主張していたといい、その考えのもと、一九〇六年五月に刑事民事訴訟法案を起草した。ところが、中国の国情に合わないとして張之洞らから非難を受けており、衝突は実際に起こりつつあったのである。⁽³³⁾

前掲の梅の論文は、日本がいかに法典を編纂し領事裁判権の

撤廃を実現したかを説明して、清国も同じ道をたどるべきことを説いたもので、その中ではやはり民法典論争にも触れている。周知のとおり、梅は民法典論争における実施断行派の領袖であり、清国での主張にその時の学説や経験が反映されていることは想像に難くない。そこで、民法典論争における梅の説を取りあげ、清国での主張内容と比較してみたい。

一八九二年、旧民法実施延期派の「法典実施延期意見」に対する反論として、断行派からは梅の執筆にかかる「法典実施意見」が提出された。個々の条文に関する議論を除くと、そこでは以下のようなことが述べられている。

a 若シ法典ヲ実施セサレハ到底条約ノ改正ヲ望ムヘカラス……
法典出テテ各人ノ權利義務ヲ明確ニスルニ非サレハ外人ハ到底我ヲ信シテ、我カ正当ナル請求ヲ容レサルコトハ、聊カ外国ノ事情ニ通曉セルモノ、皆ナ知ル所ナリ。

b 我邦全国ノ法官ヲシテ皆ナ文明国ノ法官タルニ耻チサルノ知識ト経験トヲ具ヘシムルコト能ハサルヘシ。論者且ツ杞憂ヲ抱クコト勿レ。我邦ノ法官其数多シ。中ニ其人ヲ得サルモノアルハ亦タ勢ノ止ムコトヲ得サル所ナリ。

c 外人ハ……我カ風俗人情ハ到底彼レノ風俗人情ト相容レサルノ陋俗卑情ナリト誤信セシモノ多キニ、欧洲文明国ノ法典ニ模倣セル法典ノ出テタルヲ見テ……爰ニ漸ク我レヲ待ツニ文明国ヲ以テセントスルノ傾向ヲ促カシタルハ事実ナリ。

d 慣習ヲ改ムルハ、成ルヘク道德ニ依頼シ、慣習既ニ改マリテ爰ニ始メテ法律ヲ改ムヘキヲ常トスト雖モ其機ノ熟スルニ方リ、其弊ノ大ナルモノニ至リテハ、法律ニ由リ先ンシテ慣習ヲ改メ、以テ道德ヲ制スルノ必要ナキニ非ス。

a・cを集約すると先のAとなる。この条約改正（領事裁判権の撤廃）を強く意識し、その実現のため、欧米人にとって馴染み深く理解しやすい泰西的法典を制定するという発想は断行論の根幹をなすものである。梅は清国においても、民法典論争以来の持論を主張し続けていたのであった。

法律によって慣習をあらためるとするdも、Bに通じる主張といえる。ただし、主旨は同じであるものの、両者の内容には違いも見られる。

注意したいのは、dが旧民法人事編（親族法）への批判に対する反論部分に見えるという点である。このことから梅は、慣習とのつながりが深い親族関係でさえも、法によって積極的に慣習をあらためて行く姿勢であったことがわかる。

一方、Bの前段には、「我が国の文化は日々進歩し、世情は一変して、今や欧米諸国とそっくりである。慣習を重んじる親族・相続は、そもそも外国人が痛痒を感じるものではなく、その他において欧米と日本に大きな差はない」とある。⁽³⁴⁾泰西的法律を導入して、慣習をも欧米化するという考え自体は変わらないが、外国人とは関係の薄い、つまり条約改正交渉に影響しな

い親族法や相続法には、旧来の慣習を残す余地を認めるようになっていた。

bとDに至っては変化が顕著である。民法典論争時の梅は裁判官の質についてさほど重視していないが、一転して清国には裁判官の養成を強く訴えている。もとよりbは、「法典ノ成条如何程ニ完美ナルモ、苟モ之レヲ行フノ法官其人ヲ得スハ、外人ハ決シテ我レヲ信セサルヘシ」という延期派の批判に対する反論なのだが、梅は袁世凱との会談の際、これとほぼ同じ延期派の主張そのものを述べているのである。

「泰西的法典を施行し、慣習を欧米式にあらためることで欧米人の信用を得、条約改正を実現する」という考えは、もともと民法典論争における実施断行論の根幹であった。ただ、梅が清国において説いたのは学説の主旨はそのままに、論争時あるいはその後の議論や経験を取り入れた「新断行論」とでもいふべきものであった。梅は日本で容れられなかった断行論をより現実的に即した形に改良し、清国において採用されることを期待していたのだろう。

四、清国訪問の目的

そもそも梅は何を目的に清国を訪れたのであろうか。この件について梅本人は、「韓国ノ旅行ニハ一定ノ用件アリシニ反シ清国ハ全然漫遊」（視察談（島））と述べており、各種報道に

おいても、「漫遊」「遊歴」などとされている。日本政府から差遣命令を受けている韓国出張に⁽³⁵⁾対し、清国訪問にはそのようなものが確認できないため、私人としての旅行ではあったのだろう。とはいえ、各地で清国の要人と会談していることから、単なる観光旅行でなかったことは確かである。以下、梅が清国を訪問した目的を探ってみよう。

清国訪問の旅費は、法政大学の経営母体である財団法人和仏法律学校より、「清国視察費」の名目で支出されていたことが当時の決算書などから明らかとなっている。それによると旅行にかかった費用は、「総理旅費」一九〇九円六〇銭、「随行員旅費」八〇五円九二銭、「随行員結城氏手当」一二〇円、「清国土産物代」四六三円八三銭、「雑費」六一円七二銭の計三三六一円七銭であった。⁽³⁶⁾結城琢には特に手当が支給されているが、結城は台湾総督府に勤務した経歴を持⁽³⁷⁾つたため中国語を解したであろうし、過去に一度渡清した経験（「訪問録」によれば長岡護美に随行し、この時も張之洞と会っている）もあるので、通訳と案内役を担ったためと思われる。

この経費を支出するにあたり、「総理清国視察ノ件」と題する理由書が提出されている。そこには梅が清国へ視察に赴く理由として、

一 法政速成科ノ入学期ハ来十月入学期ニ付、生徒収容上ノ必要アリ。

二 教育及人情等ヲ実地ニ視察シ知名ノ士ヲ訪フテ意見ヲ聴キ、以テ我校カ清国人ニ対スル教育ノ方針ヲ定ムルノ必要アリ。⁽³⁸⁾

という二点があげられている。

一はやや要領を得ないが、「生徒収容」から想起されるのは、寄宿舎の件である。前述のとおり、梅は袁世凱に対して留学生を収容する大寄宿舎の建設を提案しているし、さらに「清韓談」において、「寄宿舎を建るにしても先づ各省総督の承諾を得て彼等の出金を待たねばならぬ」といっている。張之洞や周馥、岑春煊といった総督たちとも同じ要件について話をしたのかも知れない。なおこの頃、法政大学は独自に留学生宿舎を建設している（一九〇六年一月二八日開⁽³⁹⁾舎）。法人の予算から旅費を出す以上は、法政大学の寄宿舎への出資を取り付ける狙いがあったか。

「生徒収容」が意味するもう一つの可能性としては、校舎の増設があげられる。当時すでに速成科第四班の学生（入学時三八八名）が在籍していたが、さらに進士館の学生が入学する第五班は八四九名におよび、法律部・政治部の二班にわけられたほどであった。⁽⁴⁰⁾このような学生数の増加を受け、一九〇七年には清国留学生普通科の設置とともに、「普通科生徒収容ノ為メ」寄宿舎敷地内に二階建ての校舎を新築することが法人内で決定されている（一九〇七年四月三日落成）。理由書中の「速成科」

は成り行きで普通科となったわけだが、そのための新校舎建設に対する助力を清国へ求めに行ったとも考えられる。

二については梅も「清韓談」で、「旅行は漫遊の外に支那留学生の事に就き多少考を待てゐた……自分は北京政府に留学生の選択と取締に就て打ち合せをする積りでゐたのです」と述べている。そして実際に、袁世凱や張之洞と留学生の件について意見交換をし、学部左侍郎の厳修とも数回にわたって会っている。漢口では東路と南路の高等小学堂を視察し、広州では広東法政学堂を訪問している。さらに、各地で速成科の卒業生と再会しているが、これも教育方針を定めるうえでは有意義なことであつただろう。

しかし、このような目的があるならばそう明言すればよさそうなのだが、梅はことさら漫遊であつたといひ、法政大学の刊行物である『法学志林』（第八巻第九号、一九〇六年）にさえ、「梅総理の清国漫遊」という題名で記事が掲載されているのである。このことから察するに、理由書の内容はあくまで表向きなものに過ぎなかつたと考えられる。

清国訪問の主たる目的は、むしろ漫遊の裏にあつたのではないか。これについて筆者は、清国による梅の招聘活動が関係していたと推測する。

梅が清国から招聘を打診されたものの、これに応じなかつたということはつとに知られている。ただ、その間の事情は従来認識されていたよりも複雑だつたようである。

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

梅招聘の経緯について、清国駐屯軍司令官神尾光臣による「駐屯軍報告第十七号」（一九〇六年七月九日）には、次のようにある。

（一九〇五年夏）袁（世凱）ハ北京政府ニ勸告シテ……沈（家本）侍郎等ニ対シ刑部ハ宜シク国家ノ進運ニ伴フ必要上、速カニ法律学堂ヲ建設シ日本ヨリ第一流ノ法律大家ヲ聘シ、学生ヲシテ完全ナル教育ヲ受ケシム可シトノ忠言ヲナサシメ……楊（樞）日本公使ニ打電シテ、日本第一流ノ法律家ニシテ清国政府ノ聘ニ応スルモノアルヤ否ヤノ調査ヲ依頼シ……楊公使ハ法学博士梅謙次郎全岡田朝太郎ノ二氏ヲ推挙シ来タレリ……此ニ於テカ刑部ハ日本公使ヲ通シテ、梅博士請聘ノ事ヲ申込マシメタリ。然ルニ楊公使ハ刑部ヘ返書シテ曰ク、梅博士ハ教授上ニ於ケル絶対ノ自由ト一ヶ月金千円ノ報酬ヲ得サレハ応ジ難シト。刑部ハ先ツ其ノ報酬多額ナルニ驚キ、種々詮議ヲ重ネタル結果、梅博士ヲ断念シ、第二候補者タル岡田博士ヲ招聘スル事ニ決シ……⁽⁴²⁾

この報告によると、北京に法律の専門教育機関である京師法律学堂を開設するにあたり、その教習として梅と、東京帝国大学教授で刑法学者の岡田朝太郎が候補にあがつた。ところが、梅との交渉は報酬の面で折り合いがつかず不首尾におわり、清

国刑部は第二候補の岡田を招聘することにしたのだという。

しかし熊達雲氏の研究によって、刑部は日本人教員を二名招くつもりであったことが明らかとなっている。⁽⁴³⁾それに楊枢の候補のあげ方からして、民事法・刑事法各分野一名ずつの招聘を企図していたと思われ、岡田は梅に次ぐ第二候補というわけではなかった。

一九〇六年一月一七日付け新聞『日本』掲載の「松岡義正氏の渡清」という記事に、

東京控訴院部長松岡義正氏は今般、清国政府の招聘に応じ、刑部直轄の法律学堂教習として不日渡清する由なるが、同氏の担任学科は民法、商法、民事訴訟法にして、曩に岡田博士の聘せられて専ら刑法、刑事訴訟法の講座を担任するあり。

とあるように、実際、梅に代わる民事法の教習として京師法律学堂に赴任したのは、東京控訴院部長判事の松岡義正であった。なお熊氏は、梅が北京に来訪した際に松岡を教習として推薦したと推測する。しかし、梅は九月一〇日に北京を離れているが、熊氏が論文内で引用する沈家本から楊枢へ宛てた九月一七日の電報には、いまだ松岡の名はあがっていない。⁽⁴³⁾よって、松岡の京師法律学堂教習就任に梅は関わっていないと考えられる。

神尾報告の日付からも明らかのように、京師法律学堂教習として梅を招聘する話は、梅が清国を訪れる以前の段階ですでに立ち消えとなっていた。ところが、清国はまだ梅の招聘を諦めていなかったのである。

岡田朝太郎は清国からの招聘の話を梅から聞いたらしく、「法案編纂⁽⁴⁵⁾及ヒ法学教授ノ為メ清国ニ赴クノ意無キヤ」と問われたと述べている。⁽⁴⁶⁾ここで注目したいのは、清国から要請のあった職務が、「法案（法典）編纂」と「法学教授」の二つであったという点である。そのため、岡田が清国と交わした契約要項の中には、

- 一 目的 清国刑法改良調査及ヒ法律学堂授業
- 二 職名 欽命修訂法律館調査員兼法律学堂教員⁽⁴⁷⁾

とある。

一方、岡田とともに赴任した松岡の契約内容はこれと異なっていた。ここでは便宜上、赴任して一年余りした後契約更改した際のものあげておく。

この者、教習にあたるほか、光緒三十三年一月一日より修訂法律館調査員を兼務す。修訂法律大臣に従い、修訂法律館囑託の民法調査に従事せよ。⁽⁴⁸⁾

刑法典編纂のため、はじめから修訂法律館調査員を兼ねていた岡田に対し、当初松岡義正に与えられた肩書きは法律学堂教習のみであった。松岡は一九〇七年二月五日になってようやく修訂法律館調査員を兼務したのだが、この間、民法典編纂に従事する日本人法学者は未定であったわけである。

このことを考慮すると、『東京朝日新聞』一九〇八年三月三十一日掲載の「梅博士と清国法典」と題する記事は大変興味深い。

新民法編纂事業事務監督の爲め、三ヶ年の契約にて梅博士が清国政府へ傭聘せらるゝとの上海電報は、博士の直話によれば目下の処敢て事実には非ざるが如し。抑も清国の法典編纂に関しては一昨年、我國の勅任官相当にして司法局長とも云ふべき官職ある董康氏が来朝の節、梅博士と会見し、一個の考へを以て法典編纂に就ては博士を勞せざる可らずと云ひし事あり。博士は該事業たる極めて重大なる問題なるを以て、借すに十年の歳月を以てせざる可らずと語りたりき。間もなく博士は清韓旅行の途に上り、董康亦帰国したるが、其後博士が在韓中董康より、愈法典編纂日本人傭聘の必要を政府へ建議したりとの書簡に接したり。後、博士は清国政府の依頼に応じ、刑法案起草を主とし、傍教鞭を執らしむる事として岡田博士を推薦したりしが、氏は目下刑法起草よりは学校の方が主となり居るが如く、而して総則だけは既に脱稿し、各編の部も脱稿遠からずといふ。

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

又民法調査の爲めには法学士松岡義正氏を推薦し、同氏は目下民法の起草中なり。商法起草に就ても人選を依頼されたるも、適當の人なきが故に其儘となり居れる由。又博士は清国にては民法と商法とを合併せん意見なるが如し。

これによれば、記事掲載の二年前すなわち一九〇六年に、清国から日本へ派遣されて来た董康が韓国・清国旅行へ出発する前の梅に接触、法典編纂への協力を求めた。そしてさらに在韓中の梅へ手紙を送り、法典編纂のための日本人招聘を建議した旨、わざわざ伝えて来たという。つまり清国政府は、梅を京師法律学堂の教習として招聘することは早々に断念したものの、なおも法典編纂者として期待を寄せていたのである。またこれを裏返せば、梅もこの時点では法典編纂への協力を拒んでいなかったということになる。こうした背景があったために、民法典編纂に従事する修訂法律館調査員のポストはしばらく空席のままであったのだろう。

このように、京師法律学堂教習として赴任する話は清国訪問以前にすでに破談となっていたものの、梅が清国の法典編纂に携わる可能性は多分に残されていたのである。そこで梅は、来るべき清国からの正式要請に対する諾否の判断材料を得るため、あるいは民法典編纂作業の参考とすることを目的に清国を訪れ、その国情を見て回ったのではあるまいか。敢えて「漫遊」と称していたのは、神尾報告が機密扱いとなっていることからわ

かるように、清国からオファーを受けていることを公言できなかったためと思われる。

結局、修訂法律館調査員にも梅が就任することはなく、その任にはほかならぬ梅の推薦により（「梅博士と清国法典」、一九〇七年二月五日付けで松岡義正が就き、民法調査にあたることとなった。すると今度は、梅を法典の起草者として招聘しようとする声が清国政府内にあがったのである。

そもそも松岡は裁判官を五年務めたキャリアを買われ、実務経験の伝授を期待されて招かれたのであり、また⁽⁴⁹⁾ 学士であったため、いわゆる「第一流ノ法律大家」でもなかった。修訂法律館の「法典編纂」は、「翻訳」⁽⁵⁰⁾ ↓「法典比較」↓「調査」↓「起草」という工程で進められており、このうちの「調査」は松岡に任せても、編纂作業の集大成である「起草」にはそれ相応の大家を起用したいという思惑があったのだろう。松岡が調査員となって間もなく翰林院侍読学士の朱福詒が、⁽⁵¹⁾ 続いて翌年三月には前駐日公使の楊枢が法典起草のため梅を招聘するよう建議している。⁽⁵²⁾

一九〇八年四月、修訂法律館は館員の董康を日本へ派遣する。半年にわたる調査によって梅のことを知悉した董は、「この国（日本）の政府が随時顧問とする不可欠な人物なので、軽々しく招聘することはできない」と判断した。⁽⁵³⁾ そして修訂法律大臣沈家本は同年一〇月二十八日、志田鈺太郎・岡田朝太郎・小河滋次郎・松岡義正に各法典草案を編纂させる旨上奏、認可され、⁽⁵⁴⁾

清国による一連の梅招聘活動はここに終止符が打たれたのであった。

おわりに

梅謙次郎は清国各地で「泰西的法典を施行し、慣習を欧米式にあらためることで欧米人の信用を得、条約改正を実現する」ことを説いて回り、日本で敗れた法典実施断行論の主張をより現実的な形に改良したうえで、清国に取り入れられることを期待していた。しかし、梅が清国の法典編纂に直接関与することは最後までなかったのである。それはなぜか。

梅は「清韓談下（法）」において、このようなことを語っている。

彼地へ行つて特に気の付くことは中央政府の政令と云ふものが地方には甚だ行はれ難い。立憲の上諭の事でも若い書生などが大騒ぎをやつて居るのみである。北京ではナカ／＼大した事のやうに考へて居るやうであるが、地方へ行つて見るとトンと左様な様子が見えぬのです。

梅の清国での所感を掲載した記事はいくつか存在するが、やはりこれと同主旨のことを述べている。前掲の梅の主張を実行するには、中央政府の発した法令が全国に行き届くことが前提

条件となる。ところが、清国は広大な国土も相まって中央集権が機能しておらず、そのような状況にないというのである。

旅行の翌年にあたる一九〇七年、直隸省より派遣された官吏を対象とする地方自治講座、「自治班」が法政大学に開設された。その開講に際して梅は、「国家統一のための地方自治」を強調している⁽⁵⁵⁾。自治班の開設は、梅が清において感じたことへの対応策であったのではなからうか。またこの頃を境に、清国官僚の日本視察は教育制度から地方自治制度を対象としたものとシフトしたことが指摘されている⁽⁵⁶⁾。

とはいえ、ようやく改革の準備がはじまったという段階であり、梅の説が実行できる環境が整うまでにはまだまだ時間を要する状況にあった。

すでに触れたとおり、修訂法律大臣の沈家本は梅と同様の思想を抱いていたが、法典編纂の準備が進むにつれ、修訂法律館の方針と梅の考えは乖離していったようである。

梅は、法典編纂に期限を設けないこと、慣習をあらためることを主張し、また前提「梅博士と清国法典」の末尾にあるように、清国において民法と商法が合併されることを望んでいた。

一方、修訂法律館は、作業が先行している刑法典のほか、各法典および付属法案の完成期限を三年と定めた⁽⁵⁷⁾。そして張之洞らによる猛反発を受けた影響か、中国の礼教民情には背かないことを宗旨としている⁽⁵⁸⁾。民商法合併論については、各国とも民法と商法を別個に設けていることなどを理由にこれを退けた

⁽⁵⁹⁾が、これは三年の期限に間に合わせるため、新しい試みを避けたのであろう。

清国政府内における梅の人気は根強かったが、法典編纂を直接担当する修訂法律館にとって、梅はすでに不都合な人物となっていたわけである。「梅博士と清国法典」に松岡義正が「目下民法の起草中」とあるが、この記事が掲載されたのは一九〇八年三月三十一日で、董康の来日(同年四月)よりも前である。起草者の正式決定は同年一〇月二十八日であったが、修訂法律館内部では早い段階で松岡に民法典の起草を託しており、梅を必要としていなかったことがわかる。

そもそも董康が日本に派遣された主たる目的も梅の招聘ではなく、当時まだ決まっていなかった商法典編纂者のスカウトであった可能性が高い。この時、董は商法の専門家として名高い東京商業高等学校・東京帝国大学法科大学教授の志田鉦太郎に接触し、その招聘を成功させているのである⁽⁶⁰⁾。同年五月一四日の『盛京時報』に掲載された「各国新聞…日法学大家論中国修律事」によれば、志田が清国より打診された時点(ここでは招聘を断っている)で梅はいまだオファーを受けていないため、梅を断念した後、目標を志田に切り替えたというわけでもない。董康が報告した梅の招聘を断念すべき理由は、簡単にいい換えれば、「梅は日本政府から委嘱された仕事で忙しい」というものである。確かに韓国の法典編纂をすでに引き受けており、多忙であったことは間違いない。だが、梅が清国の法典編纂に

携わることのなかった背景には、清国を訪問して自説を実行し得る環境が備わっていない状況を実感したこと、修訂法律館との考え方の違いから、満足の行く法典編纂を互いに望み得ないことがあったと考えられる。

注

- (1) 史洪智「日本人法学者と清朝末期の政治改革」(荒武賢一朗・宮嶋純子編『近代世界の「言説」と「意象」——越境的文化交渉学の視点から——』(『21世紀国際学術フォーラムシリーズ』第四輯、関西大学文化交渉学教育研究拠点、二〇一二年)。ただし、史料の解釈がより正確な中国語版の「日本法学博士与清末新政——以交往、輿論与制度転型為視角」(『河南大学学报(社会科学版)』第五三巻第一期、二〇一三年)の参照を勧める。
- (2) 法政大学大学史資料委員会編集『法政大学史資料集』第一集(法政大学清国留学生法政速成科特集)(法政大学、一九八八年)二五四—二五六頁。
- (3) 上年日本之公爵近衛篤磨・子爵長岡護美因感戴我朝賞賚宝星之榮、曾与前総監督汪大燮會議、欲于日本東京为中国游歴官設速成法政学院、学章甫擬就而汪大燮已卸任、近衛篤磨旋身故事遂中止。奴才抵任後正思設法統成之、適有東京法政大学校総理梅謙次郎亦建斯議、奴才当向長岡護美取得前擬学章作為稿本、而与梅謙次郎酌中改定、遂于該学校内特設法政速成科学、専教中国游学官紳、所有義務奴才均竭力賛成、日本文部亦経認可(楊枢「出使日本大臣楊枢請倣効日本設法政速成科学摺」光緒

三〇年二月初四日)一九〇五年一月九日、陳学恂・田正平編『中国近代教育史資料匯編』留学教育、上海教育出版社、一九九一年、三六五—三六六頁所載)。近衛が清国より授与された頭等第三宝星の勲記は一九〇三年二月二日付けであり、汪大燮との話し合いがなされたのはこの頃と考えられる。なお、勲章の授与は日本で行われた(李廷江編著『近衛篤磨と清末要人——近衛篤磨宛來簡集成』原書房、二〇〇四年、四八六—四八八頁)。

(4) 留学生の最大数については諸説あり、さねとうけいしゅう著『増補中国人日本留学史』(くろしお出版、一九八一年)五五—六四頁にまとめられている。なお、さねとう氏自身は約八〇〇〇人と見ている。

(5) 『法学志林』第八巻第九号(一九〇六年)掲載の「結城氏の渡清」によれば、結城は八月一〇日午前六時に新橋駅を出発。同「永原氏の渡清」によれば、永原は八月一二日午前六時に出発して神戸にて結城と落ち合い、韓国で梅と合流した。

(6) 下中邦彦編『大人名事典』第六巻(平凡社、一九五七年)四六七頁。

(7) 滿蒙資料協会編『満州人名辞典』中巻(日本図書センター、一九八九年)、『満州紳士録』第三版、一九四〇年を複製・改題)六九九—七〇〇頁。

(8) 「間日月」所載の梅の手紙では、溥浩(大連—北京間の途中駅)以来の同行者として清水法学士という人物が紹介され、九月二〇日の漢陽觀光に参加しているが、その他の史料には名前が見えない。

(9) 「談判」では北京に到着した即日のこととしているが、発行日が一日後で、より新しい情報にもとづくと思われる「晋京」記載の日付に依拠した。

(10) 梅と袁世凱とが会見した日付について、「速成科」は九月一日と報じているが、「視察談(梅)」において、梅本人が立憲の上諭が出た翌日に袁と会ったと語っていること、九月一日発の北京電である「来京(日)」に、明日袁を訪問するとあることから、「速成科」の日付は誤りと見られる。

(11) このことが書かれている「清韓談」には誤謬が多かったためにインタビューをやり直し、訂正がてら「清韓談上」「清韓談下(法)」を掲載したという経緯がある。しかし、袁世凱との会談内容など、誤りが指摘されていない箇所については問題ないものとして扱った。

(12) 選定ヲ受ケタル公立又ハ私立ノ学校ニ於テハ、清国人生徒ヲシテ寄宿舎又ハ学校ノ監督ニ属スル下宿等ニ宿泊セシメ、校外ノ取締ヲナスヘシ(前掲注4書四六一頁所載)。

(13) 「清国公使の留學生談」(『日本』一九〇六年八月二十五日)。

(14) 阿部洋著『中国の近代教育と明治日本』(福村出版、一九九〇年)一一七―一二五頁。

(15) 前掲注4書七一頁。

(16) 編纂法典一事洵属国家大事。須与欧美諸国比美毫無遜色。然仮令法律称尽善尽美、非得良裁判官不可。不然則徒法不能行、難使外人受我法權也。要之、法典之良否与改正条約關係非淺務、須期於勿生窒礙。

(17) 「視察談(梅)」に、「丁度此の富士見軒の座敷を」という

梅謙次郎の清国訪問について(青木)

記述が見えることから、東京麹町区富士見町にあった西洋料理店富士見軒での談話にもとづいた記事であることがわかり、「清韓談下(日)」も同じソースによるものと考えられる。一九〇六年一月五日付けの『読売新聞』の記事「東亜青年会總會」によれば、梅は一月四日に富士見軒で開かれた東亜青年会總會において、清韓所見の演説を行っている。

(18) 九時前同伯顔往觀法政速成科、先晤其事務員荻原敬之、晤梅謙次郎、談片刻。聴梅君講民法(因于詐欺之錯誤)、伯顔訳之、聴講者逾八十人。十時半辞出、訪范靜生不遇(嚴修撰、武安隆・劉玉敏点注『嚴修東游日記』光緒三〇年六月一八日―一九〇四年七月三〇日、天津人民出版社、一九九五年、二二四頁)。

(19) 嚴修と袁世凱との關係については、賈熟村「嚴修与袁世凱家族的友誼」(『安徽史学』二〇一〇年第五期)参照。また、前掲注1論文は、嚴修が梅と袁世凱を引き合わせたとする。

(20) 所有甲辰進士現在館肄業之内班、均送入法政大学補修科。其外班之分部各員有志遊学者、分別選択送入法政大学速成科(学部「奏變通進士館辦法遣派學員出洋游学摺」光緒三二年七月七日―一九〇六年八月二六日、学部総務司編「学部奏咨輯要」卷二、学部、一九〇九年)。

(21) 漢口到着日を明記した史料は未見だが、「旅行予定」に九月一日北京発、同一二日漢口着とある。さらに、原口要「清国の交通」(『早稲田講演』支那革命号、一九一一年)に、京漢鉄道は北京を出てから二泊三日で漢口に着くとも日付を確定する根拠となる。

(22) 典拠史料には「巡撫」とあるのみ。また、錢実甫編『清代職官年表』第二冊（中華書局、一九八〇年）一七四五頁によれば、龐鴻書は九月三日付で湖南巡撫を離任している。しかし、王樹枏編『張文襄公（之洞）全集』（文海出版社、一九八〇年）一四一七二頁所載光緒三十二年九月一三日＝一九〇六年一〇月三〇日付けの電報の題名に、「致広州岑宮保長沙龐撫台」とあるため、梅が訪れた当時は、龐鴻書がまだ湖南巡撫として長沙にいたことがわかる。

(23) 「訪問録」は「九月念四日」（九月二十四日）とし、また、正午に辞去したとするが、会談翌日に書かれた梅の手紙にもとづく「間日月」に依拠した。

(24) 張之洞「籌議約束鼓勵游学生章程摺」光緒二十九年八月二十六日＝一九〇三年一〇月六日（陳学恂・田正平編『中国近代教育史資料匯編』留学教育、上海教育出版社、一九九一年、五三、五四頁所載）。

(25) 「到金陵」は、梅一行を「五人」と報じている。

(26) 「帰京」に周馥と会ったとあるが、どこで会ったかは書かれておらず、「清韓談上」には「総督」とあるのみ。また前掲注22錢実甫書一五〇一頁によれば、周馥は九月二日付で両江総督を離任している。しかし、劉世虹・劉路生主編『袁世凱全集』第五卷（河南大学出版社、二〇一三年）三五二頁所載光緒三十三年八月二日＝一九〇六年一〇月九日付けの電報の題名に、「練兵処致両江総督周馥電」とあるため、梅が訪れた当時は、周馥がまだ両江総督として南京にいたことがわかる。

(27) 典拠史料には「道台」とあるのみ。『清史稿』卷四七一瑞

激列伝に、「瑞激……出為九江道、有治声、移上海道……光緒三十三年、授江西按察使、遷江蘇布政使」とあることから、梅が訪れた一九〇六年＝光緒三十三年当時は、瑞激が上海道台であったことがわかる。

(28) 「詳誌」では午前一〇時だが、参会者の記録である「丘逢甲日記」に依拠した。

(29) 翟海濤「日本政法大学速成科与清末的法政教育」、『社会科学』二〇一〇年第七期。

(30) 南里知樹編『近代日中関係史料』第Ⅱ集（竜溪書舎、一九七六年）四九頁。

(31) 日付の記載はないが、「清韓談下（目）」では船上料理店のエピソードの後、「又、一日、両江総督に謁せしに」と続くことから、岑春煊との会談とは別の日であったことがわかり、一二日にはすでに広州から離れているのでこの日に比定される。なお「丘逢甲日記」に、「会散……四点後、回中学堂（散会し……四時過ぎに中学堂へ戻った）」とあることから、広東法政学堂の宴は昼食会だったようで、夕宴とは矛盾を来さない。

(32) 我国条約改正与法典編纂、其相關係実如此頭者、清国亦当必然。其現存条約、宛似我国之旧、早晚必不得不改正。而其為之、亦実先法典、法典亦要与欧美無大差。然非去故就新、風俗習慣亦至与彼同、則不合也。設令法典独取則欧美、国風民情不副之、則左枝右梧、固無論矣。然法典編纂固是一大事業、非勉強期月間而可成之。我邦欲早成之、而卅年于茲矣。清国若欲之、宜速始之、比及其成而施行之、上下亦可一新其旧風也。然猶有一言者、設令法典等已極其完美、独以之不可望条約改正也。初、

外国拒条約改正、不啻無法典、其一由不信我国法官、故時或有
 學外人為我法官之議。彼以為日本法官之法律知識、且地位不固
 或又疑其不清廉。故清国欲為条約改正、以養成法官為第一急務。
 學習法律者頻頻輩出、爾後始可矣。次司法・行政宜相分隔、法
 官獨立於是始固。次宜大養清廉之風。我邦法官幸皆清廉。其或
 佞為有貪賂者、蓋敗于訟者疑心生暗鬼訛言而然也。不則或為姦
 者強之于当事者而自橫奪之、法官為被冤耳。清国法官亦要如此
 果然、則条約改正亦未為難事也(梅謙次郎「条約改正与法典編
 纂」、『順天時報』明治四〇年四月七日＝一九〇七年四月七日所
 載)。

(33) 李貴連「清季法律改革与領事裁判權」(同氏著『近代中国
 法政与法学』北京大学出版社、二〇〇二年所収)。

(34) 我邦文化日進、世情一變、今也与欧美諸国宛然相似。親
 族・相統重慣習者、外国人固不感痛痒。其他彼此無大差矣(前
 掲注32論文)。

(35) 『官報』第6901号(一九〇六年七月二日)六頁に、「御
 用有之韓国へ被差遣」とある。

(36) 法政大学大学史資料委員会編集『法政大学史資料集』第二
 七集、五のII和仏法律学校に関する資料・続(自明治三一年至
 明治四二年)、(七)法人関係書類(法政大学、二〇〇六年)一
 〇八頁。

(37) 前掲注6書。

(38) 前掲注36書一〇三頁。

(39) 前掲注36書一〇九頁。

(40) 前掲注2書二六三頁。修学期間は一年半だが学生は一年お

梅謙次郎の清国訪問について(青木)

きに入学してくるため、二つの班の在籍期間は半年重なること
 になる。

(41) 前掲注36書一〇四頁および一一三頁。

(42) 神尾光臣「駐屯軍報告第一七号」明治三十九年七月九日＝
 一九〇六年七月九日(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.
 C10071808400、明治三十九年 臨密大日記)。

(43) 熊達雲「清末中国における日本人法律教員および法律顧問
 招聘の経緯について」京師法律学堂と修訂法律館による招聘を
 中心に」『社会科学研究』第三三卷、二〇一三年。

(44) 駐日楊大臣鑒。感電悉。承薦志田、甚好。惟学堂經費支絀、
 不能再出重瀉、且宗旨重在裁判実験、不必拘定博士、請另為物
 色一人、合同薪水祇能照矢野例……(沈家本「法律大臣請代發
 駐日本楊大臣電」光緒三二年七月二九日＝一九〇六年九月一七
 日潛字七二〇号、注43論文所載)。

(45) 後掲「梅博士と清国法典」によると、法典編纂のための日
 本人招聘を清国政府が正式に決定したのは梅の韓国滞在以後の
 ことなので、この時の打診は非公式なものであったと思われる。
 神尾報告において言及がないのはそのためだろう。

(46) 岡田朝太郎「清国既成法典及ヒ法案ニ就テ」『法学志林』
 第二三卷第八・九号)。

(47) 文部省「東京帝国大学法科大学教授法学博士岡田朝太郎外
 二名外国政府ノ招聘ニ応シ俸給ヲ受ケ並在職者ニ関スル規定ヲ
 適用スルノ件」明治三十九年九月二八日＝一九〇六年九月二八日
 (JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.A0401011100、公
 文雜纂・明治三十九年・第三六卷・文部省・文部省、農商務省

一・農商務省一。

(48) 該員除充當教習外、自光緒三十三年十一月一日起、並兼欽命修訂法律館調查員。應遵修律大臣命令、從事法律館所屬托調查民法事宜(司法省「清國政府應聘中ノ判事松岡義正附加契約締結ノ件」明治四〇年二月二〇日＝一九〇七年二月二〇日(JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A104010138500、公文雜纂・明治四〇年・第一九卷・司法省・司法省、文部省・文部省、農商務省一・農商務省一)。

(49) 松岡科長義正司裁判者十五年經驗家也(沈家本「法学通論講義序」、沈家本著『沈寄移先生遺書』甲編下冊、文海出版社、一九六四年所収)。そして前掲注44の電文にも、「宗旨重在裁判實驗」というように、招聘者の条件として裁判の實務經驗を重視するところある。

(50) 陳煜著『清末新政中の修訂法律館——中国法律近代化的一段往事』(中国政法大学出版社、二〇〇九年)一四五頁。

(51) 翰林院侍讀学士朱福銑奏、慎重私法編別。請聘日本法学博士梅謙次郎為民商法起草員(『光緒朝実録』卷五八三、光緒三十三年一月己酉＝一九〇七年二月二六日条)。

(52) 日本編制法典半自歐人、而我国編制法典似可令法政畢業生起草、但延聘一二法学家如日人梅謙次郎等、以為商定(楊樞「前駐日欽使楊樞擬奏陳時政摺稿(三統)」、『盛京時報附張』光緒三十四年二月初四日＝一九〇八年三月六日所載)。

(53) 遂於今年三月館事粗定後、派令臣館提調大理院推事董康前赴日本、詳細訪察。該員在日本將及半載深悉梅謙次郎、為該國政府隨時顧問必不可少之人、断非能輕易聘用(沈家本ら「奏

為議覆朱福銑奏慎重私法編別選聘起草客員摺」光緒三十四年一月初四日＝一九〇八年一〇月二八日、『順天時報』光緒三十四年一〇月二二日＝一九〇八年十一月一日所載)。

(54) 修律大臣沈家本奏、聘用日本法学博士志田鉦太郎・岡田朝太郎・小河滋次郎・法学士松岡義正分纂刑法・民法・刑民訴訟法案。允之(『光緒朝東華錄』第五冊、光緒三十四年冬一〇月丙辰＝一九〇八年一〇月二八日条)。

(55) 国家者以統一為貴、故必以中央政府為統一之機關。然国家僅恃此惟一之機關、則必有許多不便之處……故于一政府之下、分為無數地方自治团体、勢所必至有固然者(梅謙次郎述、某氏筆記・訳「自治制講習科開講辭」、『国報』一九〇八年第一期)。

(56) 黄東蘭「清末官僚・紳士による明治地方制度の視察」(同氏著『近代中国の地方自治と明治日本』第六章、汲古書院、二〇〇五年)。

(57) 仰見朝廷慎重立法變通宜民之至意。曷勝欽服。查原奏內稱編纂法典、事務浩繁、不能不專一辦理。除刑法一門、業由現在修訂法律大臣沈家本奏明草案不日告成、應以編纂民法・商法・民事訴訟法・刑事訴訟法諸法典及附屬法為主、以三年為限、所有上列各項草案一律告成等語……臣等自當殫竭心力、以冀有成(沈家本「修訂法律大臣奏擬修訂法律大概辦法摺」光緒三十三年一〇月初二日＝一九〇七年一月七日、『政治官報』第一九号、光緒三十三年一〇月初八日＝一九〇七年一月一三日所載)。

(58) 臣等仍督同編纂各員限定課程分類起草、一面派員調查各省民商習慣、隨時報告。總以酌采各國成法、而不戾中国之礼教民情為宗旨(前掲注53奏摺)。

(59) 日本修正民法時、梅謙次郎曾議提議合編、以改約期近急欲頒行、而不果……為民法之合編等語查、自法國於民法外特編商法法典、各國從而効之均別商法、於民法各自為編……合編之說似未可行（前掲注53奏摺）。

(60) 遂於今年三月館事粗定後、派令臣館提調大理院推事董康前赴日本、詳細訪察……訪有日本法學博士志田鉀太郎、為商法專家、名譽甚著、稟經臣等公同商酌、聘充臣館調查員。電請出使日本國大臣胡惟德、妥定合同、約其來京（前掲注53奏摺）。

(61) 日本有名之法學博士東京法政大學校長梅謙次郎氏、日前就中國法律事業發抒其意見曰、清政府現編纂法典將聘余纂修民法、其美此事不確。蓋余並未曾受清政府此等交涉……商法雖聘志田博士編纂、而志田氏以有故辭謝、尚未得其人。「梅博士と清国法典」と内容が似ていることから、同じソースによった記事であり、董康来日直前頃の状況を述べたものと思われる。

梅謙次郎清国訪問旅程表（一九〇六年／明治三十九年／光緒三十二年）

日付	都市	場所	会 同 者 ※（ ）は典拠史料での呼称	出 来 事	典 拠 資 料
八月二五日	仁 川	仁川港	結城琢、永原寿太郎 ※随行の兩名は史料に明記されている場合のみ記載	信濃川丸に乗船し、大連へ出航。	「大連著発」 「視察談（島）」
	大 連	大連港	出迎えの官民数十名	午後七時に到着。	「大連著発」 「視察談（島）」
八月二六日	大 連	馨城町扇芳亭	関屋貞三郎（民政署関屋庶務部長）、入沢重磨（入沢事務官）、上田恭輔（上田通訳官）、平田恒太郎（平田正金銀行支配人）、川村景敏（河村郵船支配人）、箕輪馬三郎（箕輪三井物産会社支配人）、山縣組代表者、山葉組代表者、宅組代表者、志岐（支岐）組代表者、稲松松之助、有賀定吉、圓谷胖治、栗林巳己藏、浅野外吉、三輪善兵衛、ほか数名	浅野の手配による歓迎会。午後一時過ぎ散会。	「大連著発」
	大 連	伊勢町東洋ホテル	数多の訪客	ホテルに投宿。	「大連著発」
	大 連	伊勢町東洋ホテル		早朝より訪問客に接見。	「大連著発」
八月二七日	大 連	美濃町千勝館	佐藤至誠、岡本恵三郎、田中武八、結城琢（結城）、永原寿太郎（永原）	午前一一半より佐藤主催の慰労の宴で談話（法政大学の現況および将来の方針、時事問題について）。館主の懇請により「花笑鳥舞」と揮毫。	「大連著発」
	大 連	大連市内要所	関屋貞三郎（関屋氏）	午後二時に東洋ホテルを出発し、関屋の案内で大連市内要所を見物。	「大連著発」
	大 連	大連駅	見送りの数多の官民有志	午後六時発の列車で宮口へ出発。	「大連著発」

八月？日	大石橋			「視察談（島）」
八月？日	宮口			「視察談（島）」
八月？日	山海関			「視察談（島）」
八月？日	塘沽	清水某（清水法学士）	清水某が乗車。	「間日月」
八月？日	天津		ホテルに到着。	「視察談（島）」
八月三十一日	北京	御河橋畔六国飯店	ホテルに到着。	「談判」「晋京」（日）」
九月一日	北京	日本公使館	袁世凱との会談の約束を取り付ける。	「談判」「晋京」
九月二日	北京	頤和園万寿山北洋公所	袁と約一時間会談（寄宿舎の建設、速成科の学期延長、法典編纂と条約改正との関係、裁判官の養成について）。	「談判」「晋京」「来京（日）」「速成科」「視察談（梅）」「帰京」「清韓談上」
九月五日	北京	畿輔先哲祠	日本留学帰国者や学部大臣らによる歓迎会兼懇親会で演説（立憲の三大条件について）。記念撮影。	「厳修日記七・一七」「来京（公）」「歓迎会」
九月？日	北京	愛新覺羅善耆（肅親王）	会談（領事裁判権の撤廃について）。	「帰京」「清韓談上」「清韓談下（法）」「清韓談」
九月九日	北京	御河橋畔六国飯店	午後一〇時まで会食（進士館の学生受け入れについて熟議？）。	「厳修日記七・二二」
九月一〇日	北京	前門駅	夜、厳修と范源廉に見送られ、京漢鉄道の快速列車にて漢口へ出発。	「厳修日記七・二二」「游歴」「赴鄂」

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

九月二二日	漢口		結城琢（東洋雑誌之主筆某）、永原寿太郎（博士随員）	漢口到着。	「清韓談上」「赴鄂」「旅行予定」「到鄂」
九月一？日	武昌	東路・南路高等小学堂	梁鼎芬、結城琢（東洋雑誌之主筆某）、永原寿太郎（博士随員）	半日学校を視察。雑誌『東洋』を教員に進呈。	「到鄂」
九月一？日	武昌				「清韓談上」
九月一？日	長沙	洞庭湖		長沙へ行く時に船で渡る。	「視察談（梅）」
九月一？日	長沙		龐鴻書（巡撫）	会談。	「清韓談上」
九月一？日	長沙		張承祖	会談。	「清韓談上」
九月一？日	長沙	船中		長沙からの帰りに家族への手紙を書く。	
九月一？日	漢口			朝、長沙より帰着。	「間日月」
九月二〇日	漢陽	古琴台・大別山など	清水某（清水法学士）、島村某（島村法学士）、秋山煜禧（秋山某）、結城琢（随行兩人）、永原寿太郎（随行兩人）	午後、観光。	「間日月」
九月二一日	漢口	水野幸吉邸	水野幸吉（水野領事）、水野千代子（細君）	夜、水野領事方にて日本料理を馳走になる。	「間日月」
九月二一日	漢口	武内金平邸	武内金平（竹内金平）	夜、武内の招待を受け、武内宅にて簡易な馳走を受ける。	「間日月」
九月二一日	漢口	中国料理屋	武内金平（竹内金平）、正金銀行雇支那人の頭	午後九時過ぎより、正金銀行に勤める中国人の招待で、中国料理屋にて馳走になる。	「間日月」
九月二三日	漢口	旅館		午前一時半、旅館に帰る。	「間日月」
九月二三日	漢口	渡し場	結城琢（随行二人）、永原寿太郎（随行二人）	午前九時、迎えの小蒸気船江清号に乗り、長江を渡って武昌へ。	「間日月」「訪問録」
九月二三日	武昌	黄鶴楼下の渡し場	結城琢（随行二人）、永原寿太郎（随行二人）	轎車に乗り、湖広総督衙門へ。	「間日月」「訪問録」

梅謙次郎の清国訪問について（青木）

九月三日	武昌	湖広総督衙門正堂	張之洞（鄂督）、汪鳳瀛（王逢瀛）、沈珪（沈珪、原口要（原口工学博士）、秋山煜禧（秋山通訳）、結城琢（随員一人）、永原寿太郎（随員二人）	午前一一時到着。約二時間会谈（留学生問題、領事裁判権の撤廃について）。大礼服を着用。	「間日月」「帰京」「清韓談上」「赴鄂」「訪問録」
	武昌	漢江春	曾某（釐金局長曾某、曾局長、結城琢（二行）、永原寿太郎（一行）	曾某の招きにより、酒楼にて中西混合の昼食。	「間日月」「訪問録」
九月二四日	漢口	旅館	結城琢、永原寿太郎	午後四時、漢口へ出発。	「間日月」
	漢口	旅館	結城琢、永原寿太郎	午後五時、旅館に帰着。	「間日月」
九月二五日	南京	長江上船中	結城琢（日本新聞報館執事）、永原寿太郎（随員）、ほか随員二名	午後八時半発の汽船で南京へ出発。	「間日月」「訪問録」
	南京	悦生公司	周馥（総督、寧垣）、法政大学の卒業生、結城琢（日本新聞報館執事）、永原寿太郎（随員）、ほか随員二名	夫人宛ての手紙を書く。	「間日月」
九月二六日	南京		周馥（総督、寧垣）、法政大学の卒業生、結城琢（日本新聞報館執事）、永原寿太郎（随員）、ほか随員二名	南京到着、ホテルに投宿。	「到金陵」
	南京		周馥（総督、寧垣）、法政大学の卒業生、結城琢（日本新聞報館執事）、永原寿太郎（随員）、ほか随員二名	歓迎会。	「帰京」「清韓談上」「到金陵」
九月二七日	南京		周馥（総督、寧垣）、法政大学の卒業生、結城琢（日本新聞報館執事）、永原寿太郎（随員）、ほか随員二名	朝、記念撮影。	「帰京」「清韓談上」「到金陵」
	南京		周馥（総督、寧垣）、法政大学の卒業生、結城琢（日本新聞報館執事）、永原寿太郎（随員）、ほか随員二名	上海へ出発。	「視察談（島）」
九月二八日	上海		呂海寰	広州の夏同和に旅程を知らせる電報を打つ。	「到粵」
	上海		瑞澂（道台）	会谈。	「清韓談上」「清韓談上」
九月二九日	上海		瑞澂（道台）	会谈。	「清韓談上」
	上海		瑞澂（道台）	会谈。	「清韓談上」

?	青島	膠州湾		曾昭声(曾君昭声)、阮金楼(阮君金楼)	韓国での仕事の参考とするために調査。	「清韓談上」
一〇月五日	上海			汽船で香港へ出発。		「到粵」
一〇月九日	香港			曾昭声(曾君昭声)、阮金楼(阮君金楼)	広州へ出発。	「到粵」
一〇月一〇日	広州	広東法政学堂		夏同和(夏用卿、夏監督)、段書雲(段学司)、丘逢甲、章某(章通訳)、阮金楼(阮通訳)、広東法政学堂の学生たち(各學員)、松山豊造(日本から二人行つて居る)、関山富(日本から二人行つて居る)、結城琢(結城氏)、永原寿太郎(永康氏)	午前九時到着。歓迎会で講演(議會、法典編纂、学理の研究)についで。詩一首を賦して各学生に贈呈。運動場で記念撮影・植樹。	「清韓談上」「到粵」「詳誌」「丘逢甲日記」
一〇月一〇日	広州	珠江船上の料理屋	居留日本人	夕宴に招待される。		「視察談(梅)」「清韓談下(目)」
一〇月一日	広州		岑春煊(総督、岑督)	岑春煊と会談(清国の発展について)、会食。		「視察談(梅)」「帰京」「清韓談上」「到粵」「詳誌」
一〇月二日	香港	香港沖船中		息子震に宛て、はがきを送る。		「年譜」
一〇月一?日	上海			日本へ出発。		「視察談(島)」
一〇月二〇日	東京	新橋駅		午前九時、列車で帰着。		「帰京」

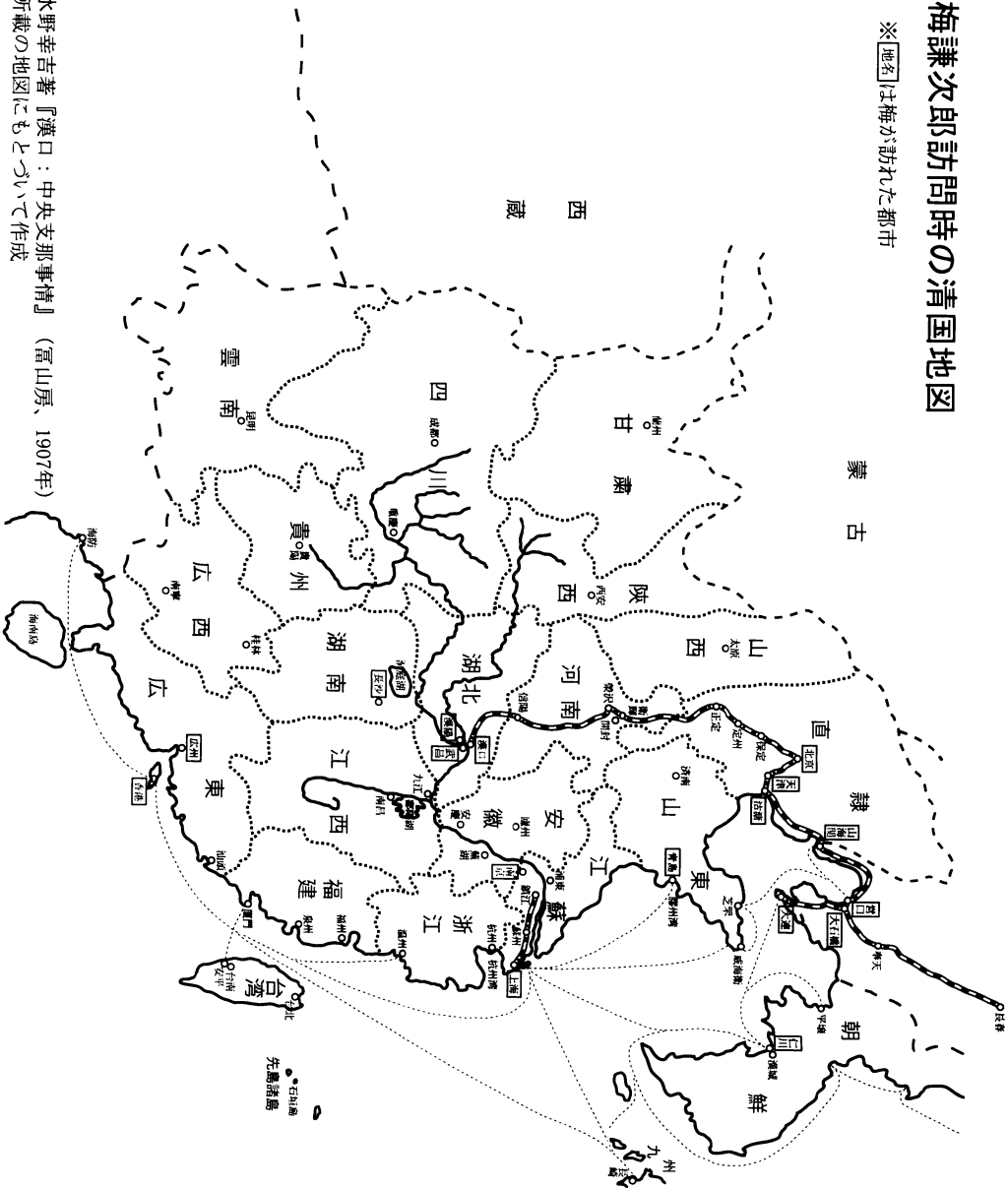
典拠史料略称一覧

- 「大連著発」＝「梅博士の消息其一(大連著発)」(『法学志林』第八巻第一〇号、一九〇六年所載)
 「視察談(島)」＝梅謙次郎述「叢議…清韓視察談」(島根県法政会編『法政会紀事』森鷗外自家製本、一九〇六年)
 「間日月」＝「博士の間日月」(東川徳治著『博士梅謙次郎』、法政大学・有斐閣、一九一七年所収)
 「談判」＝「紀梅博士会晤袁督之談判」(『申報』一九〇六年九月九日所載)
 「晋京」＝「雜記・紀梅博士晋京会晤袁督事」(『時報』一九〇六年九月九日所載)
 「来京(日)」＝「北京電報…梅博士の来京」(『日本』一九〇六年九月三日所載)
 「速成科」＝「学界紀聞…改良政法速成科」(『時報』一九〇六年九月一〇日所載)

- 「視察談（梅）」＝「博士の支那朝鮮の視察談」（東川徳治著『博士梅謙次郎』、法政大学・有斐閣、一九一七年所収）
- 「帰京」＝「梅博士の帰京」（『日本』一九〇六年一〇月二一日所載）
- 「清韓談上」＝「帰朝せる梅博士の清韓談（上）」（『法律新聞』三八六号、一九〇六年一〇月三〇日所載）
- 「嚴修日記七・一七」＝「嚴修日記」編輯委員会編『嚴修日記』光緒三十三年七月一七日（南開大学出版社、二〇〇一年）
- 「来京（公）」＝「時事・梅博士来京」（『大公報』一九〇六年九月一三日所載）
- 「歡迎会」＝「清国時事・梅博士歡迎会」（『日本』一九〇六年九月一五五所載）
- 「清韓談下（法）」＝「帰朝せる梅博士の清韓談（下）」（『法律新聞』三八七号、一九〇六年十一月五五所載）
- 「清韓談」＝「帰朝せる梅博士の清韓談」（『法律新聞』三八五号、一九〇六年一〇月二五五所載）
- 「嚴修日記七・二二」＝「嚴修日記」編輯委員会編『嚴修日記』光緒三十三年七月二二日（南開大学出版社、二〇〇一年）
- 「嚴修日記七・二三」＝「嚴修日記」編輯委員会編『嚴修日記』光緒三十三年七月二二日（南開大学出版社、二〇〇一年）
- 「游歴」＝「雜記・紀梅謙博士之游歴」（『時報』一九〇六年九月一六日所載）
- 「赴鄂」＝「時事・梅博士赴鄂」（『大公報』一九〇六年九月一四日所載）
- 「旅行予定」＝「其三（旅行予定）」（『法学志林』第八卷第一〇号、一九〇六年）
- 「到鄂」＝「交渉界紀聞・梅博士到鄂」（『時報』一九〇六年一〇月一日所載）
- 「訪問録」＝「結城蕃堂・湖広総督張之洞氏訪問録」（『太陽』第三卷第一号、一九〇七年）
- 「到金陵」＝「雜記・梅博士到金陵」（『時報』一九〇六年一〇月一四日所載）
- 「到粵」＝「交渉界紀聞・梅博士定期到粵」（『時報』一九〇六年一〇月一六日所載）
- 「詳誌」＝「交渉界紀聞・歡迎梅博士詳誌」（『時報』一九〇六年一〇月一七所載）
- 「丘逢甲日記」＝「丘逢甲『丙午日記片断』光緒三十三年八月三日（広東丘逢甲研究会編『丘逢甲集』、岳麓書社、二〇〇一年所収）
- 「清韓談下（日）」＝「梅博士の清韓談（下）」（『日本』一九〇六年十一月七所載）
- 「年譜」＝江戸恵子編『梅謙次郎年譜』（法政大学図書館・法政大学ポアソナード記念現代法研究所監修、二〇〇三年）

梅謙次郎訪問時の清国地図

※地名は梅が訪れた都市



水野幸吉著『漢口：中央支那事情』（富山房、1907年）
所載の地図にもとづいて作成